



2 まいん

こあしたにじょうぞうしょあと 小足谷醸造所跡

明治30年頃のこあしたにじょうぞうしょ小足谷醸造所(中央の大屋根の建物)、接待館を含む杜宅街 別子銅山記念館所蔵



じょうぞうしょ 醸造所あと跡

こあしたにせつたいかんは、小足谷接待館のや
や沢寄りに、レンガ造
りの煙突が林の中から
姿を見せます。

別子の山も酔いつぶれる
銘酒「鬼ごろし」

当初、酒や味噌・醤油はすべて別子山を隔てた西条より運んでいました。

しかし、品質が劣等粗悪で、酒は三分の一も水を加えて薄めたもの、醤油は塩水に着色したようなものでした。

その様子を見かねた広瀬幸平は、小足谷を開墾し、坑夫たちを楽しみとやすらぎを提供するため、明治3年(1870)小足谷に醸造所を設置しました。

同年8月から杜氏(お酒をつくる人)を兵庫県の伊丹から雇い、醸造に着手しましたが、水質や海拔1,000メートル近くの山の環境により、はじめは鉱夫の口を喜ばすようなお酒は醸造できませんでした。

結局、お酒らしいものが醸造できたのは、明治6年の暮れに、岡山県から杜氏を雇ってからのことでした。しかし、専門の酒屋がつくるお酒の味には及ばず、一時醸造作業を中止するなど苦労が続きました。



130年の時を越えて



最も繁栄した頃では、1年で100キロリットルのお酒を製造し、その銘柄は「イゲタ正宗」、別名「鬼ごろし」と呼ばれていました。坑夫は鬼に例えられ、剛健な山の男達もこのお酒を飲むと酔いつぶれてしまったと言われます。

ここでは、味噌や醤油も作られていました。

しかし、中心地が東平に移りつつある中、明治44年に製造中止となり、醸造所は大正3年(1914)に廃止されました。

